Aichi Prefectural University

紳士に投資する

――『大いなる遺産』における投機行為について――

榎　本　　洋

To Practice Speculation for Gentleman:

Speculation Activity in *Great Expectations*

Hiroshi ENOMOTO

Speculation is not an activity unfamiliar to nineteenth century British culture. Nevertheless, this economic act had been brought to the fore by the prosperity of industrial commercialism and come into prominence as a national concern in the age of Queen Victoria. With the ups and downs of economic prosperity, the period saw the boom of the economic speculations in the 1840's of the building of railway network and also the general boom of speculations in 1860's. The latter case created the great sensation among some literary authors such as Anthony Trollope who took full advantages of the boom in the creation of Melmott in *The Way We live Now*. It is indeed in this time that Dickens put his hands to *Great Expectations*.

Great Expectations teems with several characters concerned with speculative activity. In return to the kindness received from Pip on the marsh, Magwitch the convict worked very hard day and night to make Pip a typical gentleman someday. Pip deceived himself that Miss Havisham would realize his dream and finally turn out to be his benefactor. But his deception was ironically revealed when Magwitch returned from Australia to tell the whole truth about his expectations. On the other hand, the treacherous nature of Miss Havisham's speculation was also made clear through Herbert who said that she tried every means to wreak vengeance on men in general. With Pip's frustrated dream, Dickens effectively places the speculation on the center of the text and also describes a gradual collapse of their spiritual sensitiveness by pervasive strength of speculation activity. Their speculations are a kind of criminal activities for its devastating effects on the others.

In short, *Great Expectations* proves to be a speculative novel which

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

contains formal and thematic concerns with speculation. A complicated relations between the economies of expectations and speculation give a clear shape to the process of how Pip acquired the knowledge and wisdom to help his friend through speculation. The novel ends on an ambiguous and punitive tone with Pip as a working partner of a prosperous firm in Egypt. Though the Pip's story still remains elusive and exposed to full of dangers and instabilities, his future prospect has something gleaming in the distance. The text can be interpreted as carrying the bourgeois moral message that expectation and speculation don't corrupt the lives of Pip, but the other way round. For all its indeterminate ending, the novel does not suggest the complete abnegation of speculation, but its grudging acceptance. Endowed with worldly knowledge and experiences, Pip gets out of the preceding male characters of passive nature into a fresh hero with a new accent. Lastly, the fact that some Victorian fiction is closely bound up with the political economy should not escape our attractions.

1．序：バブリーな背景

ディケンズは『大いなる遺産』（*Great Expectations*、以下『遺産』と略）を1860年に執筆しているが、背景となるテクストの舞台は必ずしも同時代ではない。植民地から不法に帰国した囚人は死刑を免れないという刑法、ロンドン橋などの建設、そして一ポンド紙幣の存在などを考えれば、その背景は遥か以前に遡る。『遺産』のワールヅクラッシク版を編集したコードウェル（Margaret Cardwell）は、一ポンド紙幣がイングランド銀行に発行されていた期間が1797年から1821年の僅かな期間に過ぎないことを手掛かりに、マグウィッチ（Magwitch）が帰国する年を1821年以前か、遅ければ1825年から26年、そして物語が始まるのが1805年から９年の間とそれぞれ想定する。最終的にピップ（Pip）が15の時に遺産を相続すると考え、物語の主な展開を1815年から20年の間に特定している（*Great Expectations*, 493）。歴史的に見ればジョージ三世の晩年の十年間で、後のジョージ四世が摂政として君臨したリージェンシー（Regency）時代に相当する。ターベイドロップ（Turveydrop）やハロルド・スキンポールといった伊達もの（Harold Skimpole、ともに *Bleak House*）、サッカレーが『虚栄の市』（*Vanity Fair*）で描いたジョージ・オズボーン（George Osborne）な

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

どの社交界の名士などの存在に名残をとどめる華やかな享楽が猖獗を極めた時代で、後にピップやハーバート・ポケット（Herbert Pocket）などが出入りした“Finches of the Grove”もその一例である。

こうした一見、華やかな賑わいとは別に、この時代はまた経済的な危機に見舞われた時期でもあり、それが改革を促したことはいうまでもない。リード（John Reed）によればナポレオン戦争後のイングランドは1825年、36年、47年、57年とそれぞれ経済的危機に見舞われたという。こうした時代の要因が個人に与えた影響は主に「経済的な不安」（“economic fear”）であり、これが「投機」（“speculation”）という資産運用を一般化してきたという。

Many influences have been claimed as contributing to the late nineteenth-century deterioration of confidence, among them mechanization, urbanization, darwinism, individualism, aestheticism, imperialism, scientific determinism, philosophical pessimism. The influence that came directly home to most persons was economic fear; thus one might add to the above list the important influences of foreign trade competition, declining purchasing power, and unemployment.
(Reed, 181)

投機という現象が一般化、普遍化するという現象が進行するにつれ、小説は「表象の問題」（“a problem of representation”）としての“the economic practice”に深く関与することになったという。つまり、小説という文字媒体が経済（活動）によって左右され、テクストの“the novelistic modes of representation”にまでその作用が及んでいるという。ホルウェイ（Tatiana M. Holway）はその例証としてオースティンの『マンスフィールド・パーク』（*Mansfield Park*）、ディケンズの『ニコラス・ニックルビー』（*Nicholas Nickleby*）を取り上げ分析しているが、ホルウェイが指摘することは、作家自身の経済的なありようといったテクスト生成にまつわる外的な事情ではなく、内的な、登場人物の背景に潜在する問題である（Holway, 104）。というのも『ニコラス・ニックルビー』では、一家の没落の背景にある経済的な変動として投機行為の普遍化、偏在化が指摘されているからである。

こうした投機行為の普遍が最も著しいテクストの一つとして、これから

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

論じるのが『遺産』である。先ほど引用したリードは更に続けて、“The financial crisis of 1857 reinforced the fear of financial speculation that the railway mania had initiated, but not until after the crisis of 1866 did numerous literary works begin to appear dealing with this subject in detail”（Reed, 185）と指摘しているが、これは次の二点を示唆している。つまり、ディケンズが『遺産』に着手した1860年代初頭がまさにバブルの最中にあったということである。そのため舞台設定が20年代の過去の経済的な膨張期と一見したところ読者とは無関係に見えようとも、同時代の読者にはあまり違和感なく受容されただろう、ということ。そして、引用にあるように『遺産』がこれ以降、投機行為を扱った幾多の小説の先駆けとなったことである。

2．序②：受動的なピップ？

ところで『遺産』は表題に示唆されている通り、主人公ピップの「期待感」（expectations）を軸に展開する。それが露わになるのは、ピップが囚人と出会う一年ほどたった頃で、その夏に彼が義兄ジョー（Joe）のもとへ徒弟奉公（apprentice）に出されることがほぼ内定していた矢先である（42）。叔父パンブルチュック（Pumblechook）を介してミス・ハヴィシャム（Miss Havisham）のもとへエステラ（Estella）の遊び相手をするために出かけていく。その結果、ピップは “companionship” の見返りとしてジョーの “apprentice” の地位を得る。ところが、見知らぬ男からマグウィッチ（Magwitch）を助けた代償として金を渡され（76–7）、成人の少し前には紳士になるためにと莫大な遺産が彼のもとに転がり込む（135）、というよく知れた筋書きが続く。ところで、ロス・H・ダブネイは “expectations” という財産相続の見込み（期待）を求める主人公はディケンズの初期から一貫するもので、ヤング・マーティン・チャズルウィット（Young Martin Chuzzlewit）、ウォルター・ゲイ（Walter Gay）、リチャード・カーストン（Richard Carstone）、ヘンリー・ガウアン（Henry Gowan）など、ピップもその系譜に連なる主人公と指摘する（Dabney, 129）。つまり、自らの勤勉と努力の代償として幸運をつかむのではなく、外部からの力により結果的に幸運に恵まれるというディック・ウィッティントン（Dick Whittington）的な幸運児のテーマである。一見したところピップもその衣鉢を受けついでいることは明白である。しかし、ダブネイによれば階級とエステラへの

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

愛情という二つの点で、ピップはこれらの主人公と大きく隔たっており、これらの点は対立するものではなく、極めて巧みに扱われているがゆえにテクストに“much of its power and insight”（Dabney, 130）を付与していると述べている。とはいえ、ピップが終始、エステラへの不可解な愛情に突き動かされ、結果として性格の受動性が際立つ印象を与えてしまうため、従前のウィッティントン的主人公とはあまり隔たっていないと言う。従来の主人公との違いを述べようものなら、女性に対する“madness of love”（Dabney, 131）に相違のありようを求めるのは余り説得的には思われない。しかも、“Money is what counts, but making money is vulgar”（Dabney, 137）とあっさり割り切られているが、それ程単純であろうか。ではどこに違いがあるのか。

まず、ピップの軌跡、辿る人生が他人の「思惑」（“expectations”）の対象となることである。つまり、ピップの思惑、期待感もハヴィシャムとマグウィッチにより既に用意されたものであるが、一方ではピップは彼らの思惑、期待感を叶えるために「投機」の対象にもなっているのである。ところで、ここではマグウィッチ、ハヴィシャムの行為をひとまず投機行為と規定しよう。投機とは投資行為の見返りとして得られる報酬(又は結果)が行為にかなったものであるか否かであり、もし倫理に背馳したものであれば、それはモラルに反し投資というよりはギャンブルに近いものと考えられる。マグウィッチはピップを紳士にすることでコンペソン(Compeyson)のような連中に復讐を果たそうとする。ハヴィシャムの場合はピップにエステラへの愛情をあおり、かつて自分が味わわされた屈辱を満たそうとする（174–5)。厳密には投機の対象はエステラであろうが、ピップも巻き込まれ、影響を受ける。なぜなら、遺産が相続されると決まった時には“the architect of my fortunes”（95）と勝手な夢を抱き、ハヴィシャムの相手をした見返りとしてエステラと社会的地位を得るという砂上の楼閣を勝手に描いたからである。つまり、ピップにおいては“expectations”と（他人からの）“speculation”は密接に結びついている。このテクストでは、人物関係やその思惑も投機という経済行為になぞらえることができるのだ。

この「投機行為」はピップとハヴィシャム、マグウィッチとの間に限られたものではない。同じことは、ピップとハーバート・ポケットとの関係にも当てはまる。ピップはハーバートの夢を叶えるべく、クラリカー商会への就職に尽力する（291)。最終的にはピップもハーバートのもとで共同

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

経営者として働き（474）、社会に復帰することを考えるとピップのハーバートへの投資行為は彼の将来計画を周到に準備したものであり、受動的な人物の考えることとは程遠い。詳細は後に検討するが、こうみると『遺産』では単純に投資という行為を否定しているのではなく、許容する余地を幾許か残しているように思われる。つまり、“speculation”という一見、不真面目で、いかがわしい行為は、必ずしも堅実な労働、勤労と鋭角的に対立するものではなく、相補的なそれにあるのではないだろうか。本論ではまずこのことをピップ、ハヴィシャムらの行為を通して考察する。G. スミスは『遺産』には金銭の持つ“the humbly destructive effects”（173）を示す例証が多く含まれていると指摘しているが、必ずしも金を所有することや、金そのものの価値が否定されているわけでないことは注意すべきだろう（Smith, 173）。そして、最終的には“speculation”という行為がヴィクトリア朝の社会にとり、またディケンズ個人にとってどのような意味を持っていたのかを考察することで、テクストの成立についても垣間見る予定である。

3．ラスキンの労働観とピップ

『遺産』と同じ年はもう一つ重要なテクストを生んでいる。1860年に発表されたジョン・ラスキン（John Ruskin）の『この最後の者にも』（*Unto this Last*）は、著者自身が最上の書と自賛しながらも、労働の在り方から、富の正義とその獲得方法、富の均等な配分、労働の報酬をめぐる法則など多方面に論じた雑駁な書である。この書で当時、猖獗を極めた「政治経済学」（political economy）を批判した箇所で、ラスキンは“the action of wealth”を“the flowing of stream to the sea”（147）に喩え、富の流れも正義の法則により正しく導き、かつ管理する必要があると訴えている。『この最後の者にも』の三部「地上を審判（さば）く者」（*Qui Judicatis Terran*）という個所で、ラスキンは“science of getting rich”（132）という経済学の在り方に批判を強めており、富の公平な分配、管理も「正義の法則」により真に人間的な状態に導くことを再三述べている。ここから労働に対する報酬、つまり労働の交換の問題へと議論は進む。ラスキンによれば労働の報酬とは、他人が自分のために費やす労力と時間に比して、それと同じだけの労力、時間を他者のために調達するという、労力と時間のお互いの均

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

等な配分から成り立っているものだという。

Money payment, as there stated, consists radically in a promise to some person working for us, that for the time and labour he spends in our service to-day we will give or procure equivalent time and labour in his service at any future time when he may demand it. (Ruskin, *Unto this Last*, 150–1)

ラスキンはこうした労働とそれによって得られる見返りとが等しく、“absolute exchange”（151）の関係が成立するときに「正義」（Justice）が実現し、従って“All that it is necessary for the reader to note is, that the amount returned is at least in equity not to be *less* than the amount given”（152）と受け手と見返りの望ましい関係を規定している。そのようなラスキンにとって、地道で勤勉な努力に裏付けられた商業活動とは無縁な投機は“an unmitigated evil in a state and the root of countless evil besides”（*Essays on Political Economy*, 300）であり、“commercial lotteries”に過ぎないと断じている。確かにラスキンは“the final and best definition of money is that it is a documentary promise ratified and guaranteed by the nation to give or find a certain quantity of labour on demand”（*Unto this Last*, 138）と貨幣の価値が投機的部分にあることを認めながらも、最上の価値基準として“A man's labour for a day”に何よりも重きを置いている。貨幣の投機的な価値を（恐らく）不承不承に認めつつも、それでも健全な労働力になお一層の価値を置くという思考の枠組み（イデオロギー）にラスキンですら強く支配されていたのである[1)]。

こうした労働観を代表するのがピップの義兄ジョー・ガージェリー（Joe Gargery）だろう。パンブルチョックやガージェリー夫人（Mrs. Gargery）は、ピップがハヴィシャムのもとに出入りすることが決まると狂喜して“nonsensical speculation about Miss Havisham”（95）と、打算的な皮算用に思いを巡らすものの、ジョーは“bore no part”（95）と会話には加わらない。彼はこうして投機的な打算からは埒外に置かれる。翌日、ピップはジョーに付き添われてハヴィシャムに会いに行く。ピップはジョーのもとで徒弟として立派に仕事に専念するようにハヴィシャムに諭されるものの、ジョーはハヴィシャムに語り掛けられているにもかかわらず、ハヴィシャムではなくピップに向かって終始答える始末である。ピップはジョーの態

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

度に痛く失望するが（99）、これはジョーがハヴィシャム等が関わっている投機的な世界とは程遠いところにいることを示唆している。つまり、ジョーはハヴィシャムやその取り巻き等が既に組み込まれている論理とは無縁であり、興味深いことにハヴィシャムもそれに気づいているようである。ジョーに対して“You expected, . . . no premium with the boy?”（99）と聞く。ハヴィシャムはジョーが見返りを求めない人間であることを見抜くと、ピップに対してジョーを“your master”（100）と呼ぶ。一方のジョーには“Of course, as an honest man, you will expect no other and no more”（100）と語り掛ける。ハヴィシャムの言葉が示唆しているように、ジョーには“expectations”、つまり見込みを持たない分、誠実で、そのためビッディー（Biddy）との結婚で最後は報われる。

こう見るとジョーの物語がいささか平板だが、安定したものであるのに比べると、ピップのそれはかなり先行きが不安定で見通しの悪いものである。それはピップの職業選択にも表れている。最初のころのピップはジョーの職場である“the forge”を“the glowing road to manhood and independence”（104–5）と信じ、将来に確たる期待を抱いていたのである。ピップは依然としてジョーの職場に残っているが、それは“not because I had a strong sense of industry, but because Joe had a strong sense of the virtue of industry”（105）であるためにすぎず、ピップがジョーを人生の模範と仰いでいたかは曖昧であり、揺れる心の内をのぞかせる。この少し後に“I wanted to make Joe less ignorant and common”（107）と語るころには、「紳士」への夢を語り、ジョーに対して明らかに侮蔑的な態度をとるようになる。実際、徒弟奉公に従事しているピップは親方である筈のジョーから、一体、如何なる修練を受け、どのような技術を会得したかという仕事の内容については何も語られていない。ピップは表向き仕事に従事しているものの、今従事している仕事に専念する風でもなく、待ちの姿勢で見返りを期待し、実際、「遺産」の相続という幸運をつかむ。ここまでは、従来の主人公たちのようにディック・ウィッティントン的な幸運児であり、受動的な姿勢が際立つ。そして、この上昇志向にはエステラへの思慕が加わる（Dabney, 131）。

享楽的な生活の果て借金を残し、ピップは最終的にはエジプトのクラリカー商会で「書記」のポストを得る。“a clerk to Clarriker and Co.”（474）という地位は、行く行くはハーバートの共同経営者となる地位だが、最初

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

はハーバートの指示のもとで働くという、従属的な立場である。その点ではジョーのもとで働いていた徒弟と同じである。しかしながら注意すべきことは、この地位そのものはピップがハーバートに投資したからこそ可能になったのであり（295）、しかもピップの商会勤務は彼の仕事内容を察する限り、ジョーの堅実な仕事とは異なる投機的な内容を含むものだ。つまり、テクストのエンディングを見る限りピップは従来の受動的な主人公という立場を脱したとみることもでき、一方では“speculation”に関してはディケンズはラスキン同様に伝統的な意識に支配されながらも、その可能性をすべて否定しているわけではないという、かなり愛憎両価値的な立場をとっているように思われる。それでは、ピップの投機的行為とはどのようなものだろうか。まず、ハーバートに対する投機行為から見てみよう。

ピップが投機の対象としたハーバートは、ピップと同じくエステラに好意を寄せていたが叶わなかった青年である。しかし、“a Capitalist”（181）になるというのが本人の夢である。ピップが見るのはハーバートには“something wonderfully hopeful about his general air, and something that at the same time whispered to me he would never be very successful or rich”（175）といった具合で世俗的成功とはあまり縁のなさそうな喜劇的な人物として描かれている。そんなハーバートをなぜ投資の対象に選んだかは、ハーバートの実直さもさることながら、彼からクララ（Clara）という女性との婚約を明かされ（248）、それを実現させてやりたいとピップが思ったからだろう。その点ではハーバートとクララの関係はジョーとビディーのそれを反復したものと思われる。ハーバートとクララの関係もジョー、ビディーらと同じく、堅実で、理想化に近いことは、俗物的なポケット夫人（Mrs. Pocket）がクララの出自が“rather below my mother’s nonsensical family notions”（249）とその出身階級に不満を覚えても、打算を超えて結婚をするということからも分かる。しかも、ハーバートがピップに婚約のことを漏らしたのも、ピップがエステラへの愛情を漏らした直後だけに、余計にある種の純粋な気持ちが窺える。象徴的にも、ピップのエステラへの愛情を聞いたハーバートは“Estella surely cannot be a condition of your inheritance”（247）と述べ、エステラへの愛情と財産相続を分けて考えるよう、極めて賢明な忠告を行っている。ハーバートはピップに愛情まで投機の対象とするのは控えるよう、忠告したのだ。

ピップのハーバートに対する投機行為は、見返りとしてエステラの愛情

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

をひたすら期待する行為とは裏腹に、動機そのものは純粋で、打算的な利害、損得勘定を超えたものである。その意味ではピップの投資行為も幾分、情緒的な印象を免れず、ウェミック（Wemmick）に“some anticipation of my expectations”（287）とハーバートへの投資話を持ち掛けたときのウェミックの巧みな反応に、ピップの計画の甘さが仄めかされる。テムズ川の橋の名前を上流から逐一挙げ、選んだ橋の上からお金を落とせという（287）。

ウェミックの思考は徹頭徹尾、合理的である。更に“that a man should never—”“—Invest portable property in a friend?”とピップの問いに畳み掛けるようにウェミックは質問する。しかし、ウェミックも再三にわたる願いで“My Walworth sentiments”と“my official sentiments”を峻別することでピップの期待に添うことにする（288）。ウェミックは損得勘定を考えれば友人への投資には反対だが、個人的な関係ではそれを支持するのもやぶさかではないという、公使を分離させた判断をする。こうしたハーバートへの投資活動を人への無私な奉仕活動と考えれば、ピップの行為は何も孤立した例ではない。18世紀のテクストまで遡れば、スモレット（Tobias Smollett）のペリグリン・ピックル（Perigrine Pickle）が恋人エミリア（Emilia）の兄ゴーントレット少佐（Lieutenant Gauntlet）の出世ために陰ながら奔走する箇所がある（*Perigrine Pickle*, ch. 94）[2]。スモレットの一部影響もあるのか、人のために尽くすという善意の人物はディケンズの初期作品から目につく。これは『ニコラス・ニックルビー』のチェリブル兄弟（the Cheerybles）、『荒涼館』のジャーンディス（Jarndyce）などの“benevolent”（慈悲深い）人物像に連なる一面を持つ。特にマグウィッチの出現以来、資産の出所がわかり、いままでのようにハーバートには出資できないと悟ったピップは、ハヴィシャムを訪ねた折にハーバートへの融資に“This is an authority to him to pay that money, to lay out at your irresponsible discretion for your friend. I keep no money here; but if you would rather Mr. Jaggers knew nothing of the matter, I will send it to you”（393）と同意を求める。最初に打ち明けてから（357）、二度目のことである。ハーバートへの融資になぜこれほどこだわるのか、二年ほど続けているが“Why I fail in my ability to finish it, I cannot explain”（357）はっきりと言葉で説明できず、エステラへの愛情と同じ衝動に駆られているように思われる。説明されてない点ではチェリブル兄弟のニコラスへの支援と同じであろう。ただし、それがチェ

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

リブル兄弟の慈善的な行為ほど人目を惹かないのは、ピップの行為が最終的には自分への投資となるような経済的な成果をもたらすような利害が絡むため、純然たる無償の行為とは言いにくいからである。その意味ではピップという主人公は、ニコラス、ウォルター・ゲイとともに“expectations”の実現を求める従来の主人公と同じような側面を持つと同時に、相手に奉仕するというチェリブル兄弟、ジャーンディスのように無私の慈悲深い紳士という両面を持つと言えよう。但し、人への奉仕が投機という極めて現実的な手段によっているために、チェリブル兄弟のような非現実性は免れている。

ところでピップのハーバートへの投資が知れるのは、ピップがクラリカー商会の三番目の地位につき、うっかり彼が“the secret of Herbert's partnership”(474)を漏らしたところから本人に露見してしまう。ハーバートは当然、“as much moved as amazed”(475)と記されているが、この露見は二人が浪費癖を身に付け、“the Finches of the Grove”に出入りするようになってから(269)、数十年も隔てたものである。つまり、ピップの投機行為はピップが人間的にも、職業人として成熟を迎えた折に、その成果をもたらしたといえる。“speculation”が実のある投資になった時である。つまり、ピップの“speculation”が意味するところのものは、必ずしも投機行為そのものを排斥し、否定することではなく、寧ろ“speculation”行為を通して金銭管理、貨幣の価値を取得してこそ一廉の人物(市民)として認められるという、極めて健全な、またニーチェの言葉を借りれば「尊敬すべき、だが凡庸なイギリス人の精神」を示すモラルのように思われる(ニーチェ、286)。テクストの最終場面でピップの投機行為を許容する余地が生じるのもそのためである。一見したところマグウィッチ、ハヴィシャムの投機行為を反復したものの、彼らのそれとは鋭く対立し、一線を画するものといえるかもしれない。対立を成すことでピップの投機行為は修正を迫られ、書き直されるのである。それでは、ピップの行為と彼らのそれはどう異なるのか、全くピップの行為は不安定さを免れているのだろうか。詳しく検討する前に、まず“speculation”という行為を子細に検討してみたい。

ところで、こうしたピップの行為は彼らとは異なるとはいえ、危険にさらされる不安定さを孕んでいるために別の意味で非現実性を免れない。“speculations”の言葉の意味から、その非現実性をまず垣間見てみようと

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

思う。“speculation”（「投機行為」）と“expectations”（「期待、見込み」）に深いつながりがあることはテクストからも窺えるものの、言葉の上では厳密なアナロジーを成しているわけではない。“expectations”が OED によれば“waiting”、“looking for something as one’s due”と定義され、失敗の余地も少なく既定路線の実現と完結という自己充足性が窺えるのに対し、“speculation”は開放的だが、不安定感と流動性は拭えない。それゆえに逆の事態も生じる。つまり、挫折と頓挫を余儀なくされた“expectations”は失敗だとしても、その場合“speculation”は挫折と孤立を余儀なくされたわけではないということである。ピップの投機も同じような危険にさらされる。このテクストでは、投資的な行為を通してピップが中産階級的な“respectability”を達成するという物語である。その際、ピップの上昇運動はマグウィッチの財産と投資によって可能になり再び挫折を見ることになるが、最悪の失敗を何とか回避することができるようになったのはハーバートへの先行投資だったといえる。しかしながら、ハーバートへの先行投資も必ずしも確実とは断定しがたいところがあるのは、けだし当然だろう。つまり、マグウィッチのオーストラリアでの投機的な労働やピップを紳士にしたいという投機的な思惑と同じように、危険に満ち満ちたもので、その意味では非現実性が付きまとうのだ。

こうした実情を反映してなのかエドワード・チャンセラー（Edward Chancellor）は、投資とギャンブルにおける価値交換という観点から経済的な投機行為について定義を試みている。このような試みによっても投機的行為の定義はかなり捕捉しがたいものであり、“speculation”、“investment”、“gambling”の違いは後知恵的な見方によるものだという。

Speculation is conventionally defined as an attempt to profit from changes in market price. Thus, forging current income for a prospective capital gain is deemed speculative. Speculation is active while investment generally passive…. The line separating speculation from investment is so thin that it has been said both that speculation is a name given to a successful investment…. Similar problems of definition are encountered in distinguishing speculation from gambling. While a bad investment may be a speculation, a poorly executed speculation is often described as a gamble. (Chancellor, xi)

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

つまり、投機とは“deferred value”と“capital gains”の交換を目的とした行為なら、どのようなものでも“speculation”に分類されうるのであり、それがギャンブルなのか投機なのかは、交換の結果から生じるものによるという。ただ、“speculation”はより健全で合理主義的な投資よりはやや品位が劣るものの、ギャンブル程軽蔑的に見られるわけではないという、中間的な立場にあるが、より能動性が強調される。つまり、現実と理想（思い込み、幻想等）の双方の立場に足場を持つものといえる。これがピップの行為だとすれば、マグウィッチ、ハヴィシャムはどう評価されるべきだろうか。

次章ではマグウィッチ、ハヴィシャムの行為が他者のために奉仕するというよりも、それ自体が自己目的化してきた在り様を分析する。つまり、労働としての“speculation”のありかたである。更にマグウィッチやハヴィシャムのように、投機的行為を日々の糧にする人物をディケンズの諸テクストにも存在することを指摘することで、そのような行為がヴィクトリア朝社会の経済、文化にも深く浸透していたこと、またディケンズ自身もそうした風潮と決して無縁でなかった事について触れていく。

4．ハヴィシャムの投機行為

ハヴィシャムのもともとの立場についてマグウィッチはコンペイソン（Compeyson）を含めてこう説明している。“Him and Compeyson had been in a bad thing with a rich lady some years afore, and they’d made a pot of money by it”（344）と彼女が弟のアーサー（Arthur）とコンペイソンにより金をあてこまれた犠牲者だと教え込まれる。もっと具体的な情報はハーバートから、その事件が25年前に起こり、ポケット氏が“no man who was not a true gentleman at heart, … a true gentleman in manner”（179）と近寄ってきた男との婚約に猛烈に反対したにもかかわらず、利用され、金を騙し取られたという（179）。

ハヴィシャムの犠牲者としての立場はコンペイソンの一件以降も左程、変わってないように思われる。一巻の11章ではハヴィシャムの誕生日を祝ってセアラ・ポケット（Sarah Pocket）、カミーラ（Camila）、夫のレイモンド（Raymonnd）等が集まっているが、彼らは全員、ハヴィシャムからの財産分与を期待していた。後にピップが“great expectations”を得た

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

との知らせを受け取ると（135）、ピップと同じくポケット家の人々もハヴィシャムが彼の“benefactor”と思い込み、ピップを“the hatred of cupidity and disappointment”（201）と憎しみ、嫉妬、羨望の入り混じった眼差しで見つめ、卑しい素振りで（“with the basest meanness”, 201）取り入ろうとしたという。パンブルチョック等がガージェリー夫人と皮算用をしていたのは、すでに指摘した通りである。スーザン・ウォルッシュはハヴィシャムと営業を停止している彼女の実家の“brewery”（54）をヴィクトリア朝の経済的な関心を担うものと見なしているが、“a rank garden with an old wall”（54）が象徴するものはその非生産性である。同時にハヴィシャムの“aging female body”を“a dysfunctional market economy”（Walsh, 75）とその機能停止した市場としてのいかがわしさ、不毛性を“Her history as a swindled investor enacts the rash speculation and reckless overtrading which, to some other observers, had led to the stock frauds, bankruptcies, and bank crashes of the middle decades.”（Walsh, 74）と彼女の経歴をもとに分析する。つまり、ハヴィシャムは投機の対象（コンペイソンの欲望）の対象であると同時に被害者であるものの、何も付与するものがない非生産性、不毛さ、更に危険さが際立っているということだろう。

しかし、ハヴィシャムの存在は犠牲者にとどまらない。なぜなら、投機というものが本来的に不安定で、危険を伴うものであるなら、損失そのものをいかに軽減するかが問題になる。ハヴィシャムはその問題を専ら他人に奉仕するというピップの善意に基づく投機行為ではなく、“wreak revenge on all the male sex”（175）のためにエステラを利用するという悪意の表現で憂さを晴らす。エステラを淑女に仕立て上げ、社交界に行かせるなどしている（261）のも、自らが味わった犠牲を繰り返させようとしているに過ぎない。れっきとした加害者である。モニカ・スミス（Monika Smith）はエステラとの関係から彼女を“a devourer of heart”と呼び、次のように指摘している。

> In her role as parent, Miss Havisham becomes a devourer of hearts not unlike Compeyson. As guardian to Estella, she assumes “rights” of possessorship to such an extent that Estella’s status as desiring subject is entirely expended in the effort of becoming the object of other people’s desires. (Monika Smith, 12–13)

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

ハヴィシャムはエステラを介してピップを操り、親戚のセアラ・ポケットに対しても思い込みを利用してピップに対する嫉妬心を煽り立てようとする（155）。ピップには成人したエステラへの愛情を“Love her, love her, love her!”（237）とこれまた盲目的に愛情を煽ろうとする。ただこうしたハヴィシャムに対して、投機の対象になっているエステラの心情は遥かに冷め切っている。サリー州のリッチモンドで、いよいよこれから社交界へ、という最中、付添いのピップに対して“We have no choice, you and I, but to obey our instructions”（261）とハヴィシャムの指示（“our instructions”）に唯々諾々と突き動かされているといった印象を免れない。スミスが指摘する“a devourer of hearts”としてのハヴィシャムの影響力はこんな所にも及んでいるのだ。しかし、そのような特性が露わになるのは、預けられていたブラッドレー夫人（Mrs. Bradley）の許から、久方ぶりにサティス・ハウス（Satis House）に戻った時だった。エステラを見つめるハヴィシャムの様子は以前にも増して、彼女に縋り付こうという姿が垣間見える（298）。

ピップはこのさまを見て、“to wreak Miss Havisham’s revenge on men”（298）を果たし、復讐心を満たすまでは彼女は自分に与えられないだろうな、と思う。一方のエステラは庇護者の“fierce affection”（299）を煩わしく思い、ハヴィシャムの手を払いのけてしまったために“are you tired of me?”と怒りを買ってしまう。ところが、ハヴィシャムの投機行為は本来、愛情のこもった家族共同体を作る筈だったことが、最初にエステラが館に連れてこられた経緯からわかる。傷心のハヴィシャムは幼いエステラを見て“I meant to save her from misery like my own. At first I meant no more”（395）と当初の胸の内を打ち明けるが、彼女が美しく成長するにつれ“I stole her heart away and put ice in its place”（395）と彼女を手段として利用することになる。つまり、ハヴィシャムの投機的行為はそれ自体が目的化した結果、他者に奉仕するより、自らに破壊的な作用しかもたらさなかったと思われる。ハヴィシャムの投機の衝動性と破壊性は正に“investment”というより“gambling”行為であり、その自己中心性はマグウィッチのそれと比較するとより鮮明になる。

5．マグウィッチの投資

興味深いことにハヴィシャムの背後で蠢いていたコンペイソンも“the

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

swindling, handwriting forging, stolen bank-note passing, and such-like”（344）を生業とする詐欺師である。マグウィッチの転落はそのコンペイソンとエプソム（Epsom）競馬場で知り合い、“At last, me and Compeyson was both committed felony—on a charge of putting stolen notes in circulation—and there was other charges behind”（346）と犯罪に手を染めたころから始まった。つまり、マグウィッチはまず経済犯として登場する。贋金づくりと偽造という職業は後にマグウィッチがピップを紳士にするという投機的な行為へと発展する。“I’ve made a gentleman on you! It’s me wot has done it!”（315）とピップにおよそ十年ぶりに再会した時にマグウィッチは言う。マグウィッチの“speculation”の目的はピップを紳士にする事だが、この試みは必ずしも成功したとは言えない。なぜなら、ピップは結果的には浪費癖を身に付け、転落を余儀なくされるからだ。マグウィッチが目指したのが仕事をろくにしなくても、遊んで暮らせる身分だからだ：“I speculated and got rich, you should get rich. I lived rough, that you should live smooth”（315）. その意味ではマグウィッチの前歴が贋金づくりであり、偽紳士であるピップを作ったというのは示唆に富む。結局ここでは、紳士とは何であるかという問題に逢着するわけだが、マグウィッチの投機的行為が無残な失敗を招いたのはホーンバック（G. Hornback）が指摘するように、紳士の模範をコンペイソンに置いたために、紳士については“a matter of possessions”（Hornback, 72）という物質主義的な、偏った概念しか形成できなかったからだろう。再会したマグウィッチはピップの身に着けている“my watch”、“a ring on my finger”（316）を目ざとく見つけ、ピップがどのような生活を享受しているかをまじまじと観察する。ピップに投資することで社会に対する復讐を遂げたいというマグウィッチの野心は、ここで成就されたといえる。マグウッチの投機とハヴィシャムのそれは、既成社会に対する反発が生み出したものという点では、全く同類と思われる。

しかしながらマグウィッチの投機行為は、ハヴィシャムのそれと一見似通っているように思われても前者が後者と大きく隔たるところがある。まずオーストラリアへ流罪後のマグウィッチの生活で強調されるのは、ピップが生活のために働く必要がないよう“I worked hard, that you should be above work”（315）と自らピップのために勤勉に労働に励んでいたということである。名乗りを上げた後、こう告白する。

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

“Look’ee here, Pip. I’m your second father. You’re my son—more to me nor any son. I’ve put away money, only for you to spend. When I was a hired-out shepherd in a solitary hut, not seeing no faces but faces of sheep till I half forgot wot men’s and women’s faces wos like, I see yourn.” (315)

マグウィッチはピップに贅沢な生活をさせることを夢見て、ひたすら労働に打ち込んでいたのだ。最終的にはマグウィッチが築いた財産は、事情を知ったピップが手を付けずに、マグウィッチの逃亡資金に充てることになる（338）。それも失敗すると“I foresaw that, being convicted, his possessions would be forfeited to the Crown”（442）とマグウィッチと最後に会ったときのピップから教えられる。つまり、没収され国庫に納められるのである。マグウィッチが勤勉に働いていたのに比べると、ハヴィシャムの有様は全く反対である。とりわけ彼女が不自由な身体であること、また彼女に実家の酒造会社が既に生産を停止していること、これらはハヴィシャムの投機の不毛さ、非生産性を示している。例を挙げよう。ピップとエステラに遊ぶよう指示した後、ハヴィシャムは“So she sat, corpse-like, as we played at cards; the frillings and trimmings on her bridal dress, looking like earthy paper”（59）とその身体の不具合いが示唆され、“like a prisoner”（397）と喩えられる。ホルウェイはオースティンが投機を個人の自発的な行為と見ているのに対して、ディケンズは“focusing on the consequences of abandoning oneself to an economic fate not of one’s making, defines speculation as a form of “sit [ting] still and do [ing] nothing,” “not striving.”””（Holway, 109）と『ニコラス』論で指摘しているが、ハヴィシャムの身体性にこの投機の本質が反映されていることは言うまでもない。しかも、彼女が立ち上がることができたのも唯一、“I saw her running at me, shrieking, with a whirl of fire blazing all about her, and soaring at least as many feet above her head as she was high”（397）と全身、炎に包まれた時のみである。つまり、マグウィッチの投資が目論見はともかく健全な労働＝生産行為に根差していたのに対して、ハヴィシャムのそれは彼女の身体に象徴されるように非生産と、非労働に根差した投機であり、それがもたらすものは彼女を包んだ“a great flaming light”（397）のように自壊作用を及ぼすギャンブル性である。

当然、生み出すのも異なる。エステラを引き取り、“I stole her hear away and put ice in its place”（395）という育て方をしたハヴィシャムはエステラ

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

の “her wild resentment, spurned affection, and wounded pride”（394）を刺激し、周囲に不信と不和の種をまく。そうして、ハヴィシャムは被害者意識を暴力へと転換さす。それに対するのがマグウィッチである。ホーンバックはマグウィッチの心変わりについて、“The meaning of Mgwitch’s story … is that it concluded with his being with his boy, the boy who “stood [his] friend” out there on the marshes fifteen years before”（Horback, 62）と指摘し、彼の人生を変えたピップとの出会いの核心に “the idea of friendship”（65）を挙げている。これは極めて重要な指摘である。マグウィッチが沼沢地でピップの持ってきた食事を口にする場面がある。警戒して、見つからなかったかと念押されて、ピップは即座に否定する。この箇所は極めて重要である。

“Well,” said he, “I believed you. You’d but a fierce young hound indeed, if at your time of life you could help to hunt a wretched warmint, hunted as near death and dunghill as this poor wretched warmint is!”

Something clicked in this throat, as if he had works in him like a clock, and was going to strike. And he smeared his ragged rough sleeve over his eyes.

（19）　（Italics mine）

イタリックの箇所に注目しよう。似たような表現はマグウィッチがピップのことでジョーに詫びるときにも用いられる。曰く、“The something that I had noticed before, clicked in the man’s throat again, and he turned his back”（39）という具合である。ピップにはこの “click” が何を意味するか分からない。しかしながら、この場面はホーンバックが指摘するように、マグウィッチの嗚咽を意味し、自分の「味方」になってくれたマグウィッチが感涙に咽んでいると考えるべきだろう（Hornback, 70）。

実際にその後のマグウィッチはピップへの忠誠心を一貫して貫く。オーストラリアで過酷な労働に従事していた時も、食事中に思い浮かべていたことは “Here’s the boy again, a looking at me whiles I eats and drinks!”（315）と片時もピップのことを忘れなかったという。こうしてピップへの恩返しが始まる。パブでジョーと一緒にいたときに “a bright new shilling”（76）を “the strange man” から渡される場面である。この場面の真相は後の章で語られる（227）。つまり、マグウィッチにとってピップとの出会いは人間的な幸福との初めての出会いといえる。勿論、当のピップにとっては不

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

幸の始まりといえるだろうが、これもやがて克服されるだろう。従って、その意味ではマグウィッチがピップにもたらしたものは、不信と不安しかもたらさなかったハヴィシャムとは似て非なるもの、と言えないだろうか。

それではマグウィッチの“speculation”行為の意義は那辺にあるのだろうか。確かにハヴィシャムのそれと同じく、ピップを紳士にすることだった。たとえ、それがピップに享楽的な生活を送る機会を与えたにすぎなかったにせよ、ピップへの忠誠心、愛着はハヴィシャムには不在である。それに比べると、マグウィッチが見返りに求めていたものは、ホーンバックも指摘するように、まず何よりもピップの示した友情に報いること、彼の友情なのだ。しかも、マグウィッチの財産に伴う犯罪性は流刑地での過酷な労働により幾分、緩和され希釈されこそすれ、逆に彼の投機がピップや当初のハーバートにもたらした効果、生産性は否定できない。つまり、マグウィッチのそれは最終的には国家により没収されるものの、国庫を潤し、ピップの教育的な媒介となる。ピップが一廉の“profession”につき、勤勉と賢い投資という知恵を身に付けるきかっけになったと考えられる。それでは、ピップの投資行為はどのような実りをもたらしたのであろうか。エジプトにおけるピップの動静を念頭に置いて、ピップの投資がこの時代では、どのような意味を持ったのか考察して結論とする。

6．エジプトのピップ

ピップがエジプトで得るクラリカー商会の「事務員」(“clerk”) の地位は、それまでのピップの放縦な生活を考えれば、地味だが安定した、堅実な地位である。ところが、この事務員という職が紳士の就く専門職（弁護士、医師等）とは異なり、それほど「見栄えの良く」(“respectable”) ないことも確かである。エジプト行きを勧めるハーバートとピップの間にはこんなやり取りが進められる。

“In this branch house of ours, Handel, we must have a—” I saw that his delicacy was avoiding the right word, so I said,
“A clerk.”
“A clerk. And I hope it is not at all unlikely that he may expand … into a partner. Now Handel—in short, my dear boy, will come to me?” (444)

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

経営者（Clariker）が事務員からパートナー（“partner”）に昇格させる含みを残しつつも、この申し出が必ずしも魅力的でないことは示唆されている。ピップにとって「事務員」という職は積極的な価値を持つものでないにせよ、不承不承受け入れざる得ないものだった。その点、ピップの得る「専門職」（“profession”）について、ローマン（W. J. Lohman）は、1850年代後半のバブルのあおりを受け「事務職」という地位も先行きのある職として見直されつつあったという（Lohman, 54）。ローマンの考えは、プロフェッショナリズム（Professionalism）が成熟するにつれて、事務員の地位も単なる事務職から家父長的な資本主義の制度へと組み込まれていったという。つまり、ピップは勤勉でまじめな中産階級の勤労者であるとともに、“good fortune”を維持しようとする“speculator”、つまり実業家でもあるのだ。ピップという存在はその意味ではジョーのような単純な“manual worker”ではなく、勤労者であると同時に投機家的という二律背反的な存在なのである。そもそもこの地位を得たのがハーバートへの投資だったことは断るまでもない。問題なのはこのピップの投資行為が、単に個人の次元に止まらないことである。例えば、ピップは数年経た後にクラリカー商会で“third in the Frim”（474）の地位を占めるが、“We were not in a grand way of business, but we had a good name, and worked for our profits, and did very well”（475）と個人の利害を離れ、“our profits”という大きな名目のために働いていることが読者に語られる。問題はピップが一体、どこにいるのかという事である。

エドワード・サイードはディケンズとオーストラリアの関係について述べているが、『遺産』を考えるときにはそれ以上にエジプトの持つ意味を無視するわけにはいかない。実際のところサイードはピップの復帰の仕方が“two explicitly positive ways”で二通りの解釈を許容すると述べ、その一つとしてエジプトの存在は“a hard working trader”として身を立てるピップにはオーストラリアにはない“a sort of normality that Australia never could”を提供すると述べ、ピップの植民地での活動が幅広く容認され、普遍的な広がりを持っていたことをうかがわせる（Said, xvi）。ところで『遺産』は時代的には1820年代に負うていると考えられるが、エジプトに関して言えば同時代的な要因が反映しているように思われる。経済史家のランデス（D. Landes）によれば、沸騰地点として、エジプトが投機的な活動でにぎわい、イギリス人の貿易の中継地点として重要な役割を担ってい

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

たと述べる（Landes, 68）。つまり、同時代人としてのピップは帝国（ネイション）の貿易、交通に奉仕する最前線に身を置いていたのである。その意味ではプロフェッショナリズムとコマーシャリズム、起業家社会の興隆を象徴する帝国が生んだ紳士と言えないだろうか。

ところで“speculation”に勤しむ人物はピップが初めてないことはすでに述べた。ディケンズのテクストでは投機（資）的行為に勤しむキャラクターは結構、目につく。有名な例では『ニコラス』のニコラス（Nicholas）とラルフ（Ralph）の兄弟だろう。前者は主人公の父だが無理な投機が災いして、一家を破滅に導いてしまう。対照的に叔父のラルフは、投機をして財を成すが、兄の家族の苦境には冷淡に振舞う。似たような例は『リトル・ドリット』（*Little Dorrit*）のマードル（Merdle）も同様だが、両者に共通するのは彼らの行う“speculation”行為に纏わるある種のいかがわしさである。そのせいか、『ニコラス』ではラルフの対極的な人物としてチェリブル兄弟が登場するが、奇妙なことに実際に彼らがどのような仕事をしていたのか、その内実については雄弁に語られているわけではない。同じことはニコラス本人にも当てはまる。ラルフの没落をしり目にニコラスは兄弟のもとで修業を積み、“a rich and prosperous merchant”（*Nicholas Nickleby*, 830）として独り立ちするが、兄弟のもとでそれこそピップが事務員という身分で働くように、修業を積むものの、具体的にはどのような経緯で（または手段で）財政的に独立したかについては頑なに沈黙が守られている。つまり、ピップとは違った意味で非現実的なのである。その意味ではピップはラルフのように規模は異なるものの、投機的な行為で財をなす側面と、ヤング・ニコラス、マーティン・チャズルウィット、ウォルター・ゲイのように“expectations”を当てにするという受動性的な主人公の両面があることはすでに指摘した。彼らとはまた具体的な“profession”、つまり「専門職」の不在という点でも大きく隔たっている。それでは、なぜピップのように「見込み」を当てにする一方で、投機に勤しみ、「専門職」をうる、従来とは異なる若い主人公をディケンズは創造したのだろうか。もちろん、ピップの“profession”には論文に指摘されていた通り、時代の実情を反映させた部分があるだろう。と同時に、そこにはディケンズの家族をめぐる個人的な実情も反映されているのである。そこを考慮すれば、ピップの主人公としての斬新性がより一層、はっきりするのではないだろうか。

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

ディケンズは9人の子だくさんで、うち7名が男児である。ディケンズのテクストではその自伝性が問題になると、必ず実父ジョン（John）との関係が言及される。ミコーバー（Micawber）などはその代表格だろう。しかし、『遺産』に限って言えば父親との関係は既に過去のものとして完結した問題ではなく、自分が今度は父親になって子供たちと対峙し、父と子という関係を築くという局面に立たされる。つまり、親と子の関係はディケンズにとり今なお生々しい現在の問題であったと言える。アドリアン（Arthur A. Adrian）は父親としてのディケンズはチャリー（Charley）、ハリー（Harry）の“a definite calling”（Adrian, 38）のために厳格な教育を施したという。それにも拘わらず、期待に添うことができたのはハリーのみで、長男のチャリーはイートンからケンブリッジに進学したにもかかわらず、“a habit of perseverance”（Adrian, 40）に欠き、生来の怠け癖から破産と借金を繰り返し、挙句の果てディケンズが『春夏秋冬』（*All the Year Round*）の編集者のポストを用意するほどだったという。とりわけチャリーの経歴には同時代の影響が色濃く残っている。1857年の大不況の様子は、チャリーなどの若い世代の将来を暗くするのに十分だったという（Lohmann, 61）。テクストではピップ同様、ハーバート・ポケットの経歴にも関わる。ほかの男児も似通ったありさまだったらしい。ウォルター（Walter）はインドで1863年に死亡するが、借財をディケンズが肩代わりしている。フランシス・ジェフリー（Francis Jeffrey）も職を転々とし、財産を失う。アルフレッド・テニソン（Alfred Tennyson）にも“pattern of squandering money and accumulating debts”（Adrian, 49）が繰り返され、末子のシドニー・スミス（Sydney Smith）、エドワード（Edward）も同じように金銭にだらしなく、生活能力に欠けていたという。つまり、ディケンズにとり職（「専門職」でなくとも）について自活するという事は、家族の問題として切実だったのだ。だからこそピップという「専門職」についた主人公を描くことで“speculation”という行為そのものを否定するのではなく、部分的に認めざるを得なかったのである。それが、結果として受動的な主人公ではなく新たな、しかし極めて地味で世俗的な主人公を生み出す余地となったと思われる。ウェミックが最後まで“the portable property”（446）の行方を気にしていたように、ディケンズが述べたかったのは如何に働き、稼ぐか、そしてどううまく使うかという、世俗的なそして極めて凡庸な知恵である。サムエル・スマイルズ（Samuel Smiles）が『自助論』（*Self-Help*）

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

の第十章“Money: Its Use and Abuse”で述べているところと余り隔たっていないのだ。

Viewed in this light the honest earning and the frugal use of money are of the greatest importance. Rightly earned, it is the representative of patient industry and untiring effort, of temptation resisted, and hope rewarded; and rightly used, it affords indications of prudence, fore-thought and self-denial—the true basis of many character. (Smiles, 180)

以上、『遺産』を主に“speculation”という経済行為から分析し、ピップという主人公のある種の「斬新さ」を論じてきた。つまり、何度も言うように、従来の主人公のように“expectations”を単に期待して待つという受動的な主人公ではなく、自ら投機をおこない、それを立派な投資行為に変えることで将来への足掛かりをつかむという、今までとは多少異なる能動性のある主人公である。これが可能になったのはディケンズの家族関係が背後にあったからである。ただ、ピップという主人公の存在は、文学と経済、つまり“political economy”が密接に関係することを示唆している。この親和関係こそが人間関係を投機という経済行為になぞらえるのを可能にしたのだ。イギリスの作家には、経済（学）に多大の関心を寄せる者がいる。*Confessions of an English Opium-Eater*（1821）で特異な作風を誇るThomas de Quincey（1785–1859）が著した膨大なマルサス論やリカルドー論、Harriet Martineau（1802–76）の大部な *Illustrations of Political Economy* という「小説集」、そしてJane H. Marcetの *John Hopkins' Notions on Political Economy* など。ちょうどこれは、ドイツ文学でゲーテ、シラーなどがカント哲学などのドイツ観念論と密接に関わるのと似ているような気がする[3)]。いずれにせよ、ピップという世俗的な主人公が受容された背景には、こうした「経済学（Political economy）の文学化」という現象があったのではないだろうか。その意味ではピップという主人公の存在は、文学テクストを象徴だとか、作者の苦悩だとか、精神の王国などという専ら「詩的」感覚しか観ないという、情緒的で脆弱な感性を嗤っているのだ。

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

注

1）ラスキンについては故飯塚一郎氏の一連の論文を参考にした。残念ながら作者の死により完結は見なかったが、ラスキンの「政治経済学」の在り方をテクストに即して簡潔にまとめた論文で、ラスキンと言えば今なお美術評論としての業績しか問題にされない状況で、その経済学についてまとめた論文は貴重である。詳しくは参考文献欄を参照のこと。ただ、この論文をもってしても Political Economy の由来については触れていない。なぜ政治と経済なのか。これは極めてイギリス的な在り様なのかもしれない。20世紀の初頭にオーストリアのウィーン一派のシュンペーター、ハイエクなどが頻りに「純粋経済」と声高に主張し始めたが、これを Pure Economy だとすれば、念頭にあったのは応用経済的な Political Economy だろうか。ご存知の方はご教示いただきたい。

2）ディケンズがスモレットを愛読していたことはいまさら指摘するまでもない。ここでは、ペリグリン・ピックルとゴーントレットの関係がピップとハーバートのそれに近いことを指摘するにとどめる。ピックルがゴーントレットの昇進に本人があずかり知らぬところで尽力するのも、彼が従妹のソフィア（Sophia）との結婚を考えていたからで、これはハーバートとクララに相当すると言える。

3）イギリス文学（少なくともヴィクトリア朝小説）では文学と政治経済学の関係はかなり濃厚である。筆者がここでドイツの例を挙げたのもわけがある。ウィルヘルム・ヴント（Wilhelm Wundt）というドイツの心理学者は、『諸国民とその哲学』（*Nationen und ihre Philosophie*, 1915）の中でカント、フィヒテ、ヘーゲルなどのドイツ観念論的理想主義哲学とともに、イギリス哲学の特徴として「功利主義的利己主義」を挙げている。ここでは、ベーコン、ロックはもとよりシャフツベリー、ベンタム、スペンサー、プラグマティズムが分析の対象となっている。功利主義哲学、つまり Political Economy が「哲学」として扱われ、ゲーテ、シラー、クライスト等を論じるときにカント哲学を避けて通れないように、イギリス19世紀小説を考察するとき功利主義、Political Economy への目配りは欠かせないものだと思われる。

参考文献

Adrian, Arthur　*Dickens and the Parent-Child Relationship.* Ohio: Ohio University Press, 1984.

Chancellor, Edward　*Devil take the hindmost: A history of fictional speculation.* London: Gilon Aitken Associates ltd., 1999.

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

Dabney, Ross *Love and Property in the Novels of Dickens.* Chatto & Windus, 1967.

Dickens, Charles *Great Expectations.* Ed. by Margaret Cardwell. Oxfrod: Oxford University Press, 1994.

Dickens, Charles *Nicholas Nickleby.* Ed. by Paul Schlicke. Oxford: Oxford University Press, 1990.

Holway, M. Tatiana "The Game of Speculation: Economic and Representation", *Dickens Quarterly*, volume IX, Number 3, 1992.

Hornback, Bert G. *Great Expectations: A novel of friendship.* Boston: Twayne Publishers, 1987.

Landes, David *Bankers and Pashas: International Finances and Economic Imperialism in Egypt.* Cambridge: Harvard UP, 1958.

Lohman, Jr., W. J. "The economic background of *Great Expectations*", *Victorian Institute Journal*, 14 (1986): 53−66.

Reed, John R. "A friend to mammon: speculation in Victorian literature", *Victorian Studies*, vol. 27. N. 2, 1984.

Ruskin, John *Unto this Last, Political Economy of Art, Essays on Political Economy.* Introduction by John Bryson. London: Dent, 1968.

Said, Edward W. *Culture and Imperialism.* New York: Vintage Books, 1993.

Smith, Graham *Dickens, Money and Society*. Berkley: University of California, 1968.

Smith, Monika Rydygier "The W/Hole Remains: Consumerist Politics in *Bleak House, Great Expectations*, and *Our Mutual Friend*", *Victorian Review*, 19, 1. 1993.

Smiles, Samuel *Self-Help*. London: the IEA Health & Welfare Unit, 1996.

Walsh, Susan "Bodies of Capital: *Great Expectations* and the Climacteric Economy", *Victorian Studies*, vol. 37. N. 1. 1993.

飯塚一郎 「ジョン・ラスキンの社会経済思想(I)〜(X)」『昭和大学教養部紀要』（1970〜83） 3 〜14

「ジョン・ラスキンの“political economy”」『山梨大学教育学部研究報告』22号（1972）

「ジョン・ラスキンの経済価値論」『山梨大学教育学部研究報告』21号（1971）

Nietzsche, Friedrich 『善悪の彼岸』、信太正三訳、筑摩書房 1995.

NII-Electronic Library Service

Aichi Prefectural University

Trans. Of *Jenseits von Gut und Bose.* 1886.
Wundt, Wilhelm 『諸国民とその哲学』、房内幸成訳、大智書房 1943.
Trans. Of *Nationen und ihre Philosophie.* 1915.

NII-Electronic Library Service